

John L. Comaroff and Jean Comaroff eds.,

Civil Society and the Political Imagination in Africa: Critical Perspectives.

Chicago and London: University of Chicago Press, 1999, xi+318pp.

いお た たく お
岩 田 拓 夫

I

本書は、コマロフ両氏（以下、編著者）による理論的検討部分と、その他9名の著者による以下9章にわたる実証的検討部分から構成されている。執筆陣はアフリカをフィールドとする人類学者が中心である。本書の目的は、「アフリカ政治における市民社会」という論争が続くテーマに関して、西欧近代社会のみを原型、規範として議論するのではなく、民族誌 (p.2) の重ね合わせによる政治的想像の産物としての市民社会なるものを描き出した上で、批判的に検討することである。

描かれている対象地域・時代は多様であるが、本書を通じて一貫した論点は、ハーベソン(John Harbeson)らに代表されるアフリカにおける西歐的規範の構築を前提とした従来の市民社会論を正面から批判し、政治的イメージや自由主義のパロディー (p.33) としての市民社会のアフリカ政治における意味を様々な事例を通して描き出すところにある。

第2章以下の民族誌的観点からの市民社会に関する議論は興味深いものが多いが、紙幅の関係上詳細には紹介できない。また、第2章以下の議論も編著者の理論的検討を踏まえたものであるため、小稿では本書の全体的理解という観点から第2章以下の内容を簡単に紹介した後、編著者による理論的議論に絞って検討していく。

II

本書の構成および内容は以下の通りである。

- 第1章 イントロダクション (John L. Comaroff & Jean Comaroff)
- 第2章 フランス帝国のバリにおける市民権の実践 (G.Wilder)
- 第3章 開発途上にあるブッシュマン——カラハリとその向こうにある文明化社会の建設—— (E.Garland)
- 第4章 市民社会とその前提——ウガンダからの教訓—— (M. Karlström)
- 第5章 植民地建設——アフリカの市民社会における歴史化する議論—— (W. Cunningham Bissell)
- 第6章 政治屋の登場——シエラレオネにおける公共性と内密性の対話—— (M. Ferme)
- 第7章 市民の生活——ボツワナにおけるリーダーシップと (政治的) 遂行—— (D.Durham)
- 第8章 論争するモスリムとその実践——ニジェールにおける新たな道徳的秩序達成のための闘争—— (A. Masquelier)
- 第9章 パーマと髪染め——市民社会とファッションに意図される市民—— (A. Stambach)
- 第10章 IBB=419——ナイジェリアの民主主義と幻想の政治—— (A. Apter)

第2章では、戦間期のフランス帝国のバリにおける属民であるアフリカ人、カリブ人エリートによるフランス市民としての権利獲得運動を描きながら、植民地支配を正当化する一方で黒人がフランス市民となることを妨げた、自由と排除という矛盾した側面を併せ持つ市民社会を考えていく。

第3章では、ナミビアの“ブッシュマン”居住地域における観光開発の過程をたどることで、グローバリゼーションの潮流において支配的イデオロギーとなっている市民社会が持つ権力性について考えて

いく。

第4章では、ウガンダの国家－社会関係の検討を通じて、市民社会概念における個人主義、民族・血族性の排除、国家との自律的關係という前提に疑問を投げかけ、エスニシティーの観点からアフリカの市民社会を考えていく。

第5章では、イギリス植民地時代のザンジバルにおけるスポーツ施設をめぐる対立をたどることで、民主主義と直結され、普遍的規範とされている市民社会に関して、人種的排除を伴う植民地政府の権力的道具としての観点から考えていく。

第6章では、シエラレオネの選挙における歴史的シンボルの政治的操作による支持獲得をめぐる過程をたどることで、首長社会と国家との密接なつながり役として存在している市民社会の民主主義や公共領域における規範的市民性という諸前提に疑問を提起する。

第7章では、ボツワナにおける大統領とツワナ2世との二重権力体制の中で維持される民主主義において、社会・文化的文脈を無視した西欧的で一元的な市民社会の前提に疑問を投げかけ、平等主義と階級的特権が入り混じるボツワナの市民性を考えていく。

第8章では、ニジェールの反神秘主義イスラーム勢力によって起こされたイスラーム改革運動の過程をたどることで、市民社会を狭いアソシエーションに限定せずに、市民社会の非均質的で権力的な側面を分析に取り入れて国家と市民社会の関係を議論する必要性を提起する。

第9章では、タンザニアにおける女性のパーマをめぐる論議が、メディアによって形成された公的領域としての市民社会において政治化していく様子を検討しながら、グローバリゼーションの中でのアフリカの市民社会のあり方を考えていく。

第10章では、石油経済破綻後のナイジェリアにおいて、市民社会という公共領域が犯罪コード419に象徴される犯罪化とレント経済に結びつく国家資源の流出の場と化する現状において、市民社会は国家と自律的關係にはないことを提起している。

III

本書の主な目的は以下の2つである。ひとつめは、市民社会概念を分析道具やイデオロギー装置と捉えるのではなく、市民社会というフィルターを通して浮かび上がるアフリカ社会の矛盾や問題を、民族誌を重ね合わせながら描き出していくことである。2つめは、市民社会というグローバリゼーションの中で拡大した理念が、アフリカのローカルレベルでどのように息づいているのかを考えることである。

編著者は、アフリカ市民社会論の系譜の説明から議論を開始する。市民社会という概念は、多くの概念的問題を抱えながらもミレニアムの熱に浮かれる(p.1)中であらゆる問題への万能薬として(p.vii)影響力を持ち続けている。またアフリカに対しては、植民地支配を正当化するために用いられた啓蒙(文明化)と同じ様式で語られている。

編著者によれば、市民社会概念はミレニアムの熱に浮かれる中で偶像化されていくが、そのひとつの帰結が市民社会をアフリカの政治的変革、統治、国家－社会関係、国家－経済関係を改善するための失われた鍵であるとするハーベソンらの市民社会論であると考える [Harbeson, Rothchild and Chazan 1994, 1-2]。そこでは、市民社会とは西欧近代において培われた性善的なもので民主主義と道徳的共同体をもたらすものとされている。また分析概念としても、市民社会は国家を制限するものとして国家－社会分析に有用であると理解されてきた。

アフリカにおける市民社会の議論のきっかけとなったのは、1980年代終盤以降にアフリカ諸国において次々と起こった反政府運動であった。実際のところ、全ての社会運動が民主化という政治体制の変革を目指していた訳ではなく、給与や奨学金の遅配に対する抗議であることも多かった。それにも拘わらず一部の研究者は、反政府運動を民主化運動、さらに市民社会の成長と同一視した。編著者は、実証的検討が乏しいままにアフリカの市民社会とは本質的に国家への抵抗、自発的アソシエーション、ブルジョワ的公共領域、民主主義的性質などを持つことを

前提とされた上に、民族の断絶を超えた団結を可能にするという機能を担わされ (pp.2-3)、市民社会が本来抱えている概念的危うさが覆い隠されていると批判している。

従来の市民社会論はユーロセントリックな先入観に基づいており、そこから得られる分析結果は、アフリカの市民社会はヨーロッパのように成熟していないために民主化は進まないというものにとどまり、アフリカ政治のダイナミズムを表現することができない。編著者によれば、従来の市民社会論は西欧的価値の欠如を測る道具にすぎない (p.26)。

アフリカ市民社会論の状況を考える場合において、なぜ現在、市民社会論が影響力を持つようになったのかを考える必要がある。編著者は、アフリカ政治研究者によるこの概念の導入以上に西欧社会自身の事情による部分が大きいと考えている。

編著者は、現代に至る市民社会概念展開のプロセスを次のようにまとめている。市民社会概念は、18~19世紀のスコットランド啓蒙思想に源をなし、20世紀に入って注目されることがなくなっていたが、1970年代の東欧における民主化運動を説明するために復刻されて再び人々の注目を浴びるようになった。その後、市民社会概念は概念的故郷である西欧社会に里帰りし、冷戦後に噴出した様々な社会問題に対する解決の切り札として注目されるようになった。市民社会概念によって自信を回復した西欧社会は、西欧的価値の普遍性を再認識し、さらに非西欧地域における政治的・社会的問題の解決の切り札ともなりうると認識するようになった (pp.4-5)。その流れの中で、市民社会概念への無批判な礼讃と (p.vii)、伝統や独裁的な国家に対抗するネオ近代主義 (p.4) 的な傾向を強めていった。

アフリカは、市民社会概念による現代の啓蒙という流れにおいて普遍的歴史の名の下で再西欧化の対象とされた。その結果、政治分析においても市民社会という概念で表現する領域をアソシエーションと呼ばれる制度的な組織に狭く限定することが前提とされるようになった (pp.22-23)。

編著者はこの概念の抱える問題を次のように批判的に指摘している。アフリカ市民社会論においては、

この概念が本来有する地域性、つまり西欧的であるという現実を無視するが故に、アフリカの政治、人々の生活の文脈における議論はほとんど行われて来なかった (p.18)。その結果、市民社会の議論は多くの曖昧さを抱え、アフリカ政治研究におけるこれまでの概念とは違う何かを明確に提示しているのだろうかという懐疑 (p.3) から逃れることができない。

編著者によれば、国家と社会との対立という西欧近代において培われてきた関係を前提とするアフリカの市民社会における国家との自律的關係は幻想 (p.24) であり、市民社会概念は分析理論として不備であるだけでなく、ユーロセントリックで社会、経済的要請にも応えられない (p.7) と批判している。結局、アフリカ政治研究における市民社会概念とは民主化移行期の分析アプローチの混乱時における間に合わせの代物にすぎないと考えている。

さらに、従来の市民社会論の問題点として権力との関係と同質性に関して指摘している。編著者は、バヤール (Jean-François Bayart) の議論を引きながら (pp.20-22)、従来の市民社会論においてこの概念の非同質性と権力との密接な関係が見落とされ、市民社会の国家権力からの自律性、同質性が前提とされてきたことを批判している。

編著者は、非同質性に起因する市民社会の排他的性質を示す一方で、公—私、国家—社会という壁が崩れていることも指摘している。バヤールを引きながら議論する権力とは、ウェーバー的な強制力の合法的な独占という上からのものではなく、フーコーの下からの権力 (p.24) という発想に基づいている。そこでは、市民社会を中心とする政治的改革、つまり民主化はヨーロッパ的な市民性 (civility) を構築するとは限らず (p.22)、第10章で検討される犯罪化や独裁を生み出す余地を残している。

編著者が市民社会概念のもたらす現実的問題として危惧していることは、この概念が市場経済のグローバル化の中で、民主主義と道徳的共同体をもたらすとされる冷戦終焉後の普遍的イデオロギーとされることによって、第3章で議論されるようなNGOや開発機関の福音主義的な活動の積み重ねを通じて、アフリカにユーロセントリズムと自由主義的帝国主

義が蔓延することである (p.26)。

編著者による結論は、アフリカにおいて市民社会とは現実的な政治主体を示すものというよりは、多様で相互依存する要素の関係を表す概念であると理解すべきであるということになる (p.viii)。

IV

以上が理論的部分を中心とした本書の内容である。アフリカの文脈に沿わない従来の市民社会論に対して一貫して批判的である。しかし、市民社会を道徳的規範、民主主義への鍵と同一視する考え方に対する批判自体はすでに多くの研究者によってなされており、とり立てて新しいものではない。本書の特徴は視角の新しきや理論的提示にあるのではなく、グローバル化の潮流において市民社会という政治的イメージを構築している民族誌を描き重ねていくことであった。これまで、このようなアプローチからアフリカ政治における市民社会を描き出そうとした試みはあまりなく、その意味では本書は「アフリカ市民社会論」の議論への貢献がある。ただ、政治的イメージの捉え方が執筆者によって異なるために分かりにくさが伴うことと、批判的検討以上の提示がないことへの物足りなさは残る。

本書のアフリカの市民社会に関する政治学的な意義を、同じく市民社会概念に対して批判的な代表的論者であるシャバル(Patrick Chabal)とダロズ(Jean-Pascal Daloz) 両氏 (以下C-D) による議論と比較しながら小稿を締めくくりたい。

C-Dは、英仏語で出版された著書 *Africa Works* (副題: 政治的道具としての無秩序、仏語版タイトル *L'Afrique est partie!*、小稿では仏語版を参照) の「市民社会の幻想」という章において、市民社会概念をアフリカ政治分析に適用することと、国際援助機関によって意図的にイデオロギーとして世界中に流布されていることに対して否定的な見解を示している。C-Dのアフリカの市民社会に関する議論を簡単にまとめると以下のようになる。

C-Dは、概念的問題として市民社会概念に対する理解が研究者によってまちまちであるにも拘わらず

規範として濫用されていること、単なる社会との概念的違いが明確でないこと、さらにアフリカを議論する上では市民社会として理解するに足りる市民性に関する議論がないこと (C-D pp.30-31) を指摘している。

C-Dは、アフリカ政治研究者において「市民社会の幻想」を生じさせた原因として、アフリカの国家—市民社会関係の誤認を指摘している。西欧的モデルである国家と市民社会の二項対立がアフリカにも存在している (C-D pp.29-30) ことを前提とし、市民社会と認識される非国家的なアクターを国家に対抗する政治アクターとして過大評価している (C-D p.31)。さらに、C-Dによればそれらの研究者にはもうひとつの誤認がある。それはアフリカの国家への過大評価である (C-D pp.37-38)。C-Dの著書の第1章には、英語版では「しほんだ国家」(Whither the State?)、仏語版では「国家の空虚さ」(*L'inanité de l'État*) というタイトルがつけられているように、アフリカには市民社会の強い抵抗の標的となりうる強い国家は存在しない。加えて、インフォーマルでクライアントリスティックな支配関係にあるアフリカにおいては、公と私、国家と市民社会という二項対立は成立せず (C-D pp.32-33)、アフリカ市民社会論は現実の説明力に欠けていると批判している。

それでは、本来存在するはずのない市民社会論がアフリカにおいてこれほど議論されているのは何故であろうか。C-Dは、アフリカの市民社会論は世界銀行やIMF等のイデオロギー政策がもたらしたものと断定し、アフリカの市民社会論の外因性を強調する。C-Dは、市民社会のイデオロギー化は経済発展や民主化をもたらさず、逆にNGOの急速な拡大に伴う無秩序が権力の道具とされていると主張している。C-Dの表現を用いれば、「市民社会の繁栄」は無秩序を引き起こしているにすぎないとなる (C-D pp.35-37)。C-Dの結論は、アフリカの市民社会の議論は民主化移行期を中心とする国家への抵抗を見るためのその場しのぎのものにすぎず、アフリカの市民社会とは完全な幻想だとは言わないまでも、仮に存在したとしても萌芽状態にすぎない、というものである (C-D p.44)。

コマロフ両氏とシャバル＝グロズ両氏の議論からは興味深い比較が可能である。両者には、基本認識において多くの共通点がある。特に、ハーベソンらの規範的な市民社会論に対する批判と、市民社会概念の民主化移行期における「間に合わせ」の性格という基本認識においてである。しかし、両者には重要な相違が2つある。ひとつめは、前者はアフリカにおける市民社会を自由主義のパロディーと揶揄しながらも、現実の政治において能動的に存在、機能していると考え、それを民族誌的に描き出そうとしている。それに対して後者は、市民社会とは国際援助機関によって外からもたらされたイデオロギー、幻想と理解し、「無秩序の道具」として政治的に取り込まれるだけの受動的な存在として理解していることである。2つめは、市民社会概念の歴史性に関して、前者は市民社会概念は西欧の歴史に根付いたものであるにも拘わらず、普遍的理念としてアフリカに安易に適用する研究者をユーロセントリックと批判し、この概念の西欧的歴史性を認識しながらアフリカの歴史性の中で捉えなおす必要があると考えている。それに対して後者は、この概念は西欧の歴史性の中で形成されたものであり、西欧的市民性を備えているとは言い難いアフリカにおいて市民社会を議論することは無意味であると主張していることである。

両者の議論のいずれか一方に正否をつけられるものではないが、アフリカにおいては市民社会という概念は括弧付きで限定的に語る必要がありながらも、政治的実践の場において飛び交い自己変容している。このような現実において、C-Dのように単に幻想として外因的、受動的なものとして理解するだけでは、市民社会概念という言説と関わるアフリカ政治のダ

イナミズムを理解することは難しい。その観点からは、コマロフ両氏の警戒心を保ちつつ、民族誌の積み重ねを通じて市民社会という言説が織り成すアフリカ政治における実践の姿を描いていこうとする試みは前向きに評価される。

文献リスト

〈日本語文献〉

遠藤貢 2000. 「アフリカ『市民社会』論の展開」『国際政治』第123号.

〈外国語文献〉

Bayart, Jean-François 1989. *L'État en Afrique: la politique du ventre*. Paris: Fayart.

Bayart, Jean-François, Achille Mbembe et Comi Toulabor eds. 1992. *Le politique par le bas en Afrique noire: contributions à une problématique de la démocratie*. Paris: Karthala.

Chabal, Patrick 1994. "Understanding African Democracy: Democracy and Daily Life in Black Africa." *International Affairs Contents* 70(1).

Chabal, Patrick et Jean-Pascal Daloz 1999. *L'Afrique est partie!: Du désordre comme instrument politique*. Economica.

Daloz, Jean-Pascal ed. 1999. *Le (non-) renouvellement des élites en Afrique subsaharienne*. CEAN.

Harbeson, John W., Donald Rothchild and Naomi Chazan eds. 1994. *Civil Society and the State in Africa*. Boulder: Lynne Rienner Publishers.

(神戸大学大学院国際協力研究科博士課程)